

## 地域（あるいは地帯構造）類型の再検討

— 若林敬子 —

(注) 抽象的、「地域」として、地方自治体とコミュニティとかいふ概念でなく、「東北」「県別」「蒲原地域」等々の内容でつかっており、その広さのレベルはとくに限定しなく、包括的につかうこと。

### 第一 富農の地域的分布およびその形態

「富農」の形成発展を現資本主義段階においてどのように把握するかは、農民層分解論の最もキー・ポイントとなるところでありそれをめぐって論議のわかれるところです。「企業の経営農民」などという語が今大会においても、あいまのままできてきて、その方向性を問う場もありましたが（島崎氏から布施氏への質問その他）、一部向上農民がはたして階級の範疇たる「富農」（あるいは「富裕農」でも）なのか、それとも単なる「大型小農」にすぎないのかは、「農民」の歴史的階級的規定をめぐる大問題です。

その際注意しなくてはならぬと思うのは、その現段階の存在形態において大部地域的な相異がつきまとっているということです。それにもかかわらず、大舞台に一気にひきずりこみ、大まかな論議がされ、論議が空まわりし、非生産的になっていくところに現在論争の問題があります。今日における「富農」は大都市近郊の「土地とむすびつかない」形での酪農、養豚、養鶏等の商品的企業農形態、あるいは一方、純水田単作地帯の代表である蒲原等の局地的富農形成又北海道の大型等諸現象がありました。その諸存在形態がばたしてどう階級的に規定されるか、ということと。さらにはそのみならず、その説明内容段階ででてくることとして、村落の諸条件と結びつきをもっているのか、又もっているとしてどのような基盤の上に形成の契機をもっているかが問題となります。（たとえば大都市近郊では村落の基盤はないし、後者は低賃銀決定のメカニズムと村落あるいは部落

をめぐって問われるでしょう)このような地域差の顕著な富農の地域的分布およびその存在形態がきまこまかく実態比較分析されることこそが、農民層分解論の抽象的な両岸をはさんでの大声主張から、具体的論議形成発展へと導くための意義ある問題のたて方ではないかと考えております。

## 第二 農民運動の地域的分布およびその形態

島崎氏の発表の中で「運動があるところばかりおっかけているのではないかといわれますが……」といわれ、笑いがおこりましたが、まさに現在の唯一の階級的組織たる全日農の組織化には、大府府県別、市町村別等地域的偏在があることは、昨年の同氏の発表からもあきらかです。

一種の「伝統」のある局地的な地において、又一部指導者の偶然的存在がプラスして、少数の組織が存在しているといえる気来があります。もう一つ大切なことは、その運動の内容においても、それが米価闘争か乳価闘争か等その同じ価格闘争にしても、その農業構造のちがひによってだいたいその要求内容もことなるところが実態です。問題はその地域的運動の分布およびその闘争内容形態が、はたして将来あるいは現在においても、全体レベルの中でどう方向づけ評価可能であるかということです。

蓮見氏が「狭義の農民運動でなく、体制変革の推進力となりうる広義の農民運動」ということばをつかっていましたが、その次元での方向性はどうなのか。さらには衆議院選、地方自治体議員の政党別投票分析、さらには農民意識論までほりさげて、そ

の地域別、地帯的分析は、論をきまこまかく発展させるために必要です。もちろん島崎氏の飯山市のような事例的形、あるいは県別表の形ではなされていますが、それを一歩すすめて全体の普偏性の中で位置づけるための一歩前の前提的作業として、地域的特質を把握する必要があります。すなわち、現在拠点の諸種要求の運動を、地域的分布自体の特質、その形態の特質を地域レベルで一度整理しなおすことを通じて一般性への展望を全体の中であきらかにすることです。

## 第三 東北型Ⅱ同族型、西南型Ⅱ講組型の再検討

従来の農民社会学には上記のような地域(集団)類型があります。有賀氏の発想を歴史的段階範疇に整理しなおした福武氏の発想は、かならずしも有賀氏のそれと同じであったとも思われなく、有賀氏からするなら、「おもわぬ方向」へといき、そのままになっていくようでもあります。又、その後福武氏への数々の批判、評価の累積もご存知のとおりです。

大会席上有賀氏が「今までの既刊論文をひっぱりだして」といわれていた提案にもかかわらず、論文のみでなくその古典的とさえなってしまうような社会的な日本農村地域類型を、あらためて今日の段階で現時点での問題として、考えなおしてもよいのではないのでしょうか。関東農村はどう規定できるのか。北海道はどうなのか。

福武氏を中心として、かつて岡山、秋田の両典型調査が行われましたが、その一五年後の変化をみようと今年「農民意識調査」が

なされつつあります。単に一五年後の変化のみならず、一五後の類型理論そのものの再検討が全村研のメンバーの中で問題とされる意義もあるのではないのでしょうか。この種(講師・同族)の類型の意義がはたして今日意義あるものかどうか、又類型そのものからくる抽象的な無理はどうなのか、日本農村そのものの変化およびその方向性を具体的にみきわめる一契機、一視点として、この社会類型論の再検討を提案します。

以上大きくわけて①富農―農民層分解 ②農民運動 ③社会類型から今日の地域別、地帯的区別分析が多面的になされることを提案致します。三視点はたまたま気づいたものであり、他の視点もあります。

すべて一括して「資本の論理の貫徹」といってしまい、その内部矛盾を捨象し一面的になってしまいう危険性(小池氏のするどい指摘)をさける意味からも、地域の発展類型論をきめこまかくみるところから、内部矛盾をさぐる手がかりもあるのでないでしょうか。その意味で社会学のみならず、諸学の集約も可能と思われるます。

行政レベルにおいては、まさに、拠点的に上からみさだめた開発図がつくられ、そのもとにもとの日本国内農村における地域的差は、色かえつくりかえられてしまっているのではないかと、いう面がなるとありますが、その中になおかつ、生産力段階、社会集団なりから地域(地帯)差が問題とされる論拠は残っているのではないのでしょうか。まさに今日の日本農村の変化を内

的矛盾に目をすえてみ、なおかつ論議の生産的發展のためには、その地域的相異を全体の中に改めてみなおすことが課せられているのではないか、ということですが。大会討論の際に、安原氏がまとめられた 1 農民 2 村落 3 変化 4 推進力 5 展望の規定を地域的差に目をすえてそこから逆のきりかたをしてみてもどうか、ということにもつながりましょう。

たんに空論におわる危険をさけることから、農業生産力の現段階の規定を、歴史的問題のもとにとりあげることが必要であり、その意味で山田盛太郎氏の「日本農業生産力構造」の中の類型研究成果のふまえなどが大切になってきました。

以上、短い時間故流し文になりました。

村 研 へ

(村研大会からかえった十月二十三日)

村研会員二年生として

東大大学院

若 林 敬 子

